

# 沖合底びき網の選択漁具開発試験

(多元的資源管理漁業対策事業)

沖野 晃・村山達朗

## 1. 研究目的

小型魚等の不合理漁獲の改善、ゴミ等の混獲低減による漁獲物付加価値向上、選別作業の効率化をめざした沖合底びき網(2そうびき)漁業の選択漁具を開発する。なお、本研究は水産工学研究所、鹿児島大学、有限会社八束丸、朝日製網有限会社と協力して行った。

## 2. 研究方法

沖合底びき網の選択漁具の構造は、銚子型選択網<sup>1)</sup>と同様な上下二層分離方式の分離網とし、試験船「島根丸」により試験操業を実施した。前年度課題となった揚網時に起こる下網から上綱への漁獲物の流入防止のために、図1に示したように下網分離口付近にカーテン様の逆流防止用の網を取り付けて操業試験を行った。

## 3. 研究結果

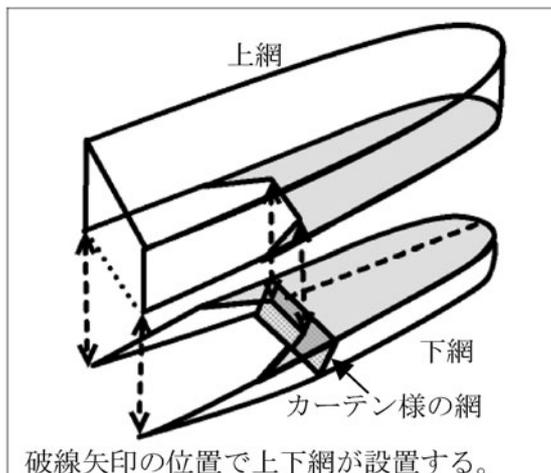


図1 下網コッドエンドに設置したカーテン様の網

試験船島根丸による試験操業は平成16年11～12月に9回行った。そのうちオートタイマー式水中テレビカメラを設置していない11月29日、12月9日、12月15日の3回の曳網試験で漁獲された漁獲物について逆流防止用の網を設置していない前年度の試験操業結果と比較を行った。その結果、前年度、逆流が問題となったマアジの下綱への入網率は低下したものの、他の魚種については、逆に下綱への入網率が増加した。また、イカ類の商品価値を低下させるトラザメの下綱への入網割合が低下し、上綱へ入網する割合が増

加した。これは、本選択漁具の商品価値向上に関する有効性を大きく減じるものであり、下綱への逆流防止網の設置は有効ではないと判断された。

選択漁具の基本的な分離機構は完成していると考えられる。しかし、普及にあたって従来とは網の形状が変わるため、漁労作業に多少の変更が必要である。また、小型魚等の不合理漁獲を考えると網目の変更等が必要となるため、実漁業において広く普及する為には、選択網の使用による優位な点を多く提示する必要がある。今後は実漁業にあわせた網型、操業海域および曳網時間での操業試験をおこない、選択網の漁獲物、とくに沖合底びき網で重要なカレイ類の分離状況を確認する。その結果から実際の漁業船での使用の検討、普及をおこなう。

## 4. 研究結果

平成16年漁期末より、浜田市漁協所属の沖合底びき網漁船2ヶ統において、本研究で開発した選択漁具が導入され、市場ではいか類の品質向上に役立っているとの評価を得ている。

## 5. 文献

1) 井上喜洋：銚子型沿岸選択底曳網の構造設計．水工研技報，23，1-7，(2001)